第四十二回

2012 都民芸術フェスティバル参加公演

邦楽演奏会

平成二十四年三月三日（土）

国立劇場小劇場

第一部 十二時 開演
第二部 十六時 開演

主催
邦楽連合会
電話三二四八－五〇二一番（古曲会内）
社団法人 義太夫協会
清元協会
財団法人 古曲会
新内協会
常磐津協会
社団法人 長唄協会
公益法人 日本三曲協会
（五十音順）

助成
東京都
（公財）東京都歴史文化財団
邦楽振興基金
（㈳）実演家著作隣接権センター（CPRA）
私的録音補償金管理協会（sarah）

後援
（公財）日本文化振興財団

ご挨拶

本日は「邦楽演奏会」にお出かけ下さいまして、ありがとうございます。四十二回を迎えられましたのも、皆様のご支持の賜と、出演者ならびに関係者一同、厚く御礼を申し上げます。

この邦楽演奏会は、都民芸術フェスティバルの参加公演として、昭和四十六年から毎年続けてまいりましたが、昨年は東日本大震災の影響でやむなく中止といたしました。被災地の皆様におかれましては一日も早い復興をお祈り申し上げます。

邦楽には多くの種類があり、日頃はそれぞれが独自の演奏活動を行っておりますが、七団体が一同に集まっての演奏会は、首都圏では、この邦楽演奏会だけでございます。

お馴染みのないものでも、ご鑑賞の参考としていただけるよう、歌詞の電光掲示、また幕間の短い時間ですが、お二人の先生による簡単な解説を加えることにいたしました。ロビーには箏と三味線を展示いたしました。休憩時間などにお気軽に触れていただき、より邦楽に親しんでいただければと存じます。

なにかと不行届きの点もございましょうが、お許しをいただきまして、どうかごゆっくりとお楽しみくださいますよう、お願い申し上げます。

平成二十四年三月三日

邦楽連合会　代表　竹内道敬

第一部　番組　（十二時開演）

一、山田流箏曲　都の春（みやこはる）

解説：吉野 雪子

箏　山勢 松韻

渡邊 好勢　仲山 純勢　石見 満方勢

谷 和登勢　大木 紘勢　鈴木 花矢勢

利根川 倫勢　三槇 乙勢　原田 幸詠勢

桑田 栄歌勢　小室 道勢　磯貝 柾梓勢

三絃　山勢 麻衣子

武田 祥勢　加藤 貞勢　奥山 益勢

【解説】

鍋島直大作詞、三世山勢松韻作曲。明治二十三年（一八九〇）東京音楽学校（現東京芸術大学）の開校式に開曲された。櫛田栄清（一八四五～一九〇三）や長瀬常男一の協力があったと伝える。

明治という新時代の発展をたたえた内容で、典型的な手事物形式をとっており、〈前弾 ―前歌 ―合の手 ―中歌 ―手事 ―後歌〉という形で、それまで歌中心だった山田流では、やや特異な新傾向の作品。

三世山勢松韻（一八四五～一九〇八）は幼くして失明。慶応二年に山浦勾当となったが、明治四年に当道制が廃止になったため検校に登官せず、松韻を名乗った。

明治十三年以降音楽取調係に出仕して唱歌改良運動につとめ、のち明治二十四年に東京音楽学校教授に就任した。

【歌詞】

〈前弾〉

〽賀茂の川風のどかなる、都の春になりぬれば、野山の草木おしなべて、

〽花咲きにけり白妙の、不二の高根も陸奥（みちのく）も、〽積もりし雪の名残なく、

〈合の手〉

〈手事〉

〽恵みも深き大君の、豊かなる世に立ち返り、万代（よろずよ）歌う声ぞ絶えせぬ、〽万代歌う声ぞ絶えせぬ。

二、長唄　五段目角兵衛獅子（こだんめかくべえじし）

唄　杵屋　勝四郎

杵屋　勝　彦

杵屋　巳之助

三味線　杵屋　勝三郎

杵屋　勝正雄

杵屋　勝十朗

【解説】

三世桜田治助作詞、二世杵屋勝三郎作曲。弘化四年（一八四七）三月、江戸中村座で、十二世市村羽左衛門が踊った「仮名手本忠臣蔵」十一段返しの中の五段目。これは「忠臣蔵」の各段に登場する人や事柄に縁のある人物に扮して、一人で踊り抜いたもので、「忠臣蔵」がよく知られていたからこその趣向であった。

この長唄曲は、五段目で早野勘平が鉄砲で猪を撃つ場面をもじったもので、猪を角兵衛獅子に見立てた洒落た曲。角兵衛獅子は越後から江戸へ出稼ぎにきた曲芸師のことで、上方では越後獅子、江戸では角兵衛獅子といった同じもの。よく知られた長唄の「越後獅子」の文句を借りているところもある。

狸の角兵衛獅子が出て、盆踊りがあり、鉄砲（種子島）に当たったという事から「当たるもの」尽しになる。蕎麦に当たる（中毒する）とは、江戸で一時蕎麦にあたるという噂があったことを効かせている。短い中に洒落とユーモアに溢れた、江戸らしい気分を伝えてくれる。

【歌詞】

二上り〽松の陰、雪より花より月がよい、そりゃ何として、襟に掛けたは鞨鼓じゃのうて、夜がな夜一夜、タタッポポ腹鼓、そっこで狸の角兵衛獅子、浮かれ浮かれて来たりける。

〽越路潟、お国名物あるその中に、えっちり宵から踊りに浮かれ、盆の月夜に戯れごとよ、田舎なまりの一節に、

〽来るか来るかと浜へ出て見れば、浜の松風音やまさるさ、ほいの、まっかとな、〽アイヤ、これはとな、これはとな、お地頭の前でも遠慮はないぞよ、こんぐら返って、おっくら返って、面白や。ちゃっと立って、しなものや。

三下り〽射止めた猪をここかしこ、探りまわりて、こりゃどうじゃ。

〽猪にはあらで旅稼ぎ、捨てて見捨ててこれ待った。このままここを去のうとは、それが辛気の種子島。あんまり邪険じゃあろぞいな、手練手振りのひと踊り。

〽当たる物には何々ぞ、竿を並べて陸釣りの、浮きに川魚、置き炬燵。こしゃく娘の袖褄に、ちょっと小当たり、どどんがかっちり楊弓場。またも当たるは八卦にふぐ汁、蕎麦たにし。当たり文句で女郎の手管、うちの嬶が八つ当たり。〽悋気おしゃらば、きりりと回して柔の手、当たり年。

〽花に姿を角兵衛獅子、行方訪ねて、行方訪ねて走り行く。

三、荻江節　八島

唄　荻江ちか
荻江幸代
荻江とも香

三味線　荻江香世
荻江理
荻江万世

【解説】

藤尾勾当作曲の同名の地歌曲を荻江化したもの。移行した年代は未詳だが、幕末のころ荻江里八（三世清元齋兵衛）が、「山姥」「鐘の岬」などとともに荻江に移したものと推定されている。

ただし明治十二年（一八七九）に初演されたという説もある。もとは修羅能の謡曲「八島」の歌詞を適宜省略したものだが、途中にクドキ風の部分もある。

荻江節は江戸時代十八世紀後半に初代荻江露友が長唄から分派したもので、主に吉原で唄われてきた三味線音楽。長唄から演劇的・舞踊的な要素を抜き去ったもので、上調子をつけず、お囃子を入れないことを原則とする。江戸時代からの伝承曲は二十曲ほどで、現在は「古曲」のひとつになっている。

【歌詞】

三下り〽釣りの暇も波の上、霞渡りて沖行くや、海女の小舟のほのぼのと、見えてぞ残る夕暮れや。〽浦風までものどかなる、しかも今宵は照りもせず、曇りも果てぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなき。

〽西行法師は嘆けとて、月やは物を思わする、闇は忍ぶにようか〳〵、浦風出たぞ来そ来そ曇る。また修羅道の鬨の声、〽矢叫びの音振動せり。〽今日の修羅の敵は誰そ。なに能登守教経とや。あら物々しや、手並みは知りぬ、思いぞ出ずる壇の浦の、〽その船戦今は早や、閻浮に帰る生死の、海山一度に震動して、船よりは鬨の声。〽陸には波の盾、〽月に白むは、〽剣の光り、〽潮に映るは、〽兜の星の影。〽水や空、空行くもまた雲の波の、打ち合い刺し違うる、船戦の駆け引き、〽浮き沈むとせしほどに、春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れいる鴎、鬨の声と聞こえしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける。

四、常磐津　乗合船恵方万歳（乗合船）

浄瑠璃　常磐津　清若太夫
常磐津　松重太夫
常磐津　若羽太夫

三味線　常磐津　一寿郎
常磐津　啓寿郎

上調子　常磐津　美寿郎

【解説】

もとは三世桜田治助作詞、五世岸沢式佐ほかが作曲した「魁香樹いせ物語」で、常磐津、富本、長唄、竹本の掛合曲だった。天保十四年（一八四三）一月市村座初演。それを慶応二年（一八六六）一月に乗合船のくだりを常磐津に改曲し、今の題名にしたもの。

隅田川の渡し舟を宝船に、乗り合わせた七人を七福神に見立てた新春の江戸風俗で人気が高い。女船頭、白酒売り（江戸時代には正月の飲み物だった）、大工、俳諧師、巫女、万歳の太夫、才蔵らが出て、それぞれがおもしろい趣向を語る。

舞踊でもそれぞれに見せ場があり、都合で人物の加減ができる。今日は時間の都合で一部を省略して演奏される。

【歌詞】

〽筑波根の、この面かの面と口真似に、問わず語りを庵崎の、〽海上遥かに見渡せば、五色彩る宝船、よい乗り合いと、わせられても、乗り遅れたは、いぶかしな。〽色にゃ賢いそれ様なれど、なじょさっしゃれたエエ恋知らず。〽イイヤ悔むな、そこへ気が付かぬ、へへ太夫じゃなっけれど、いずれも様へ改めて、ご祝儀申し入りのある、芝居をちょうと立ち見して、つい遅なわるご無礼と、足を速めて来たりける。

「やれ／／、嬉しや嬉しや。わしはまた向うへ越える船じゃと思うた。ヤア美しい姉えたちが、これはありがたい、ありがたい」

「アコレ／／。そのように女さえ見ると、もらっちもない事を。女のない国から参ったように、無性にありがたがる事はないわさ、第一わしが外聞が悪いわさ」

「アアコレ／／太夫様。はる〴〵／／三河の国からこうして来るも、お江戸さあの美しい姉えさんたちを見物がてらじゃて、まあ一服吸うべえかな」

「ホホオ、さては足下たちもすこぶる好色家と見えるね、極嬉だね、ホホホ…。ヤ、たのも／／」

「しかしながら、袖振り合うも他生の縁だ、なんぞ面白い話を、みんなやっつけねえ」

「ほんにそれが、ようござんしょう」

「サア／／、これからは番匠殿、お手前の番じゃ、お手前の番じゃ」

「ええ仕方がねえ。そんなら大工道具になぞらえて、こじつけ話をやっつけべい」

〽そも番匠の始まりは、叩き大工のこちとらが、聞いても上の空仕事、嘘を突きのみ差曲尺を、使い馴れたる友達と、〽すぐに裏釘かえして後は、ほんに辛気な溝鉋、憎や節木の性悪と、

「サアく、これから宗匠先生、玉句を承りとうござる」

「発句とやら、ぼっくとやら、早く聞きてえね、サア／／早く／／／／」

「さな宣そ、諸事風雅の狂道は、士農工商の生業までも穿たねばならぬて、エエ凝っては思案にあたわずと申せば、各々方騒がせ給うな、騒がせ給うな、エエこうっと、春風や、ええ春風や」

〽春風や、黒い羽織に小脇差しを差して、ゆらり／／と船場へ降りやる。

「エイヤはなはだ酩酊、ええ、時に景色は未明の事に限りやすね、白昼は埃まん／／として、野暮ものたっぷ。コレ恐るべでげす、乞い願わくば、船衆急ぐべだよ」

〽こちらも急ぐ送り船、程なく着岸、さ、一つ聞こし召せ、ところを重ねて、香りつん／／花に風、軽く来て吹け酒の泡。ムフフ、ハハハ、ムフフ、ムハハハ…笑いこうじて腹立てて、えい／／筋をいうべや泣き上戸。

「サア／／三河の太夫さん、これからお前の番じゃ、お前の番じゃ」

「これはまた迷惑な。才蔵、仕方がないわ。まず初春のことじゃから、おめでとう寿ぎを、さらばお祝い申そうか」

〽鼓おっ取り声つくろい。〽ああ、やんりゃ目出度やな、鶴は千年の名鳥なり、〽亀は万年のよ、ご寿命たもつ、〽鶴にも優れ、〽亀にも増す、〽今日この御家をば、〽長者の心と、祝い栄えましんまする。

〽一本の柱が一の宮よ、ヤレ二本の柱が二せんだか、〽ハオヤ三本の柱が榊の明神、ヤレ四本の柱が四六や天王、〽五本の柱が牛頭天王、〽千本余りの柱オンバヨ、おっ取り立て喜ばれんたり。

〽誠に目出度う候いけるとは、これからそろ／／万歳、〽オヤ万歳、〽へへ万歳、〽オヤ万歳、エ万歳、〽万歳／／／／、万歳楽で御喜びだ、ハハハ…。

〽太夫さん、あらけえね、〽コレ銭や金の湧くようだに、コレワイ、〽これさまのお座敷に、ソレ掴みどりが始まる、〽子供らもご油断めさるな、〽もっこを持ったらしょこない込めだに、コレワイ、〽木鉢を持ったらすっくいこめ、〽升を持ったら量りこめ、〽美しい姉さまにゃ、才蔵なんぞは内証づくなら、五両や三両はさっくれべいに、コレワイ、〽ソレそこらの姉様の頬のまわり、お鼻のまわり、言われぬ所が、へへへ…べっちゃらこ、〽オヤまっちゃらこ、〽べっちゃらこや、〽まっちゃらこ、ホホヤレ、ホホヤレ、まっちゃらこに、〽まんざらこ、〽まんざら野暮では、どうした才蔵、ありゃせまい。〽代々栄えて御万の長者よ、なお万歳楽までもやら、

「へ、おめでとう」

〽共に嬉しき乗り合いに、声春雨と鳴りひびく、初雷に人々は、我が家をさして急ぎ行く。

五、新内　蘭蝶（らんちょう）

浄瑠璃　富士松　小　照
三味線　新内　仲三郎
上調子　新内　伊勢一郎

【解説】

本名題「若木仇名草」。初代鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永初年ごろ（一七七二ごろ）成立か。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、榊屋の此糸と馴染みを重ね、女房のお宮が身を売った金までいれあげてしまう。

お宮は此糸に逢い、蘭蝶と別れてくれと頼む。此糸が蘭蝶と初めて逢ったときを語る「四谷で初めて」と、お宮が蘭蝶と夫婦になったころを語る「縁でこそあれ」の二つのクドキがよく知られていて、とくに「縁でこそあれ」は新内節の代名詞にもなっているほどである。

全曲を演奏すると一時間半以上もかかる大曲なので、今日ははじめの「虫尽し」とクドキが演奏される。「明烏」と並ぶ人気曲であり、代表曲である。

新内節は富士松薩摩掾から始まり、鶴賀若狭掾が出て作品を提供したが、その弟子の新内という者の人気が出て、曲の名称となった。それで新内節は富士松と鶴賀姓の人が多いようになった。

一部の人が新内姓を名乗るようになったのは昭和二十六年ごろから。

【歌詞】

〽名にし負う、隅田に添いし流れの身、役者の似面写し絵や、浮世声色身振師と、名に流れたる市川屋、蘭蝶という鳥ならで、この榊屋に巣を組みて、いつも塒（ねぐら）と通い来る。

〽横手の籬（まがき）へ顔差し入れ、

「もし松浦さん、よう来たかとも言ってくんなんせんのう。東雲（しのめ）さん、何だか強い凝りようさ、その伊勢物語という文の御文体が拝みたいわい」

「よう無駄を言いなんすのう、ほんに今朝は遅くって、かみさんに角が生えなんしたろう」

「何さ、遅いほど首尾のよい性質（たち）さ、あの福の神に角が生えたら、見世物に出して大金儲け、それじゃまた奢（おご）られやすわえ」

「悪口ばっかり言いなんす、此糸さんが待兼ねていなんす、早う二階へ行きなんし」

「あい〳〵お忝（かたじ）け、待兼ねねえが聞いて呆れやす」と、

〽仇口悪口二階の口、階子上れば船宿が、

「これ若い衆、どうだ、ずっと部屋へ入れ申そうか」

「はい、まあちっとの内ここに」と、

〽行燈（あんどん）下げて廊下座敷、

「うむ、悪しくするな、お客が在原の業平という色男か」

「いえいえ、女中客でござります。もし、此糸さん、ちょっと」

「はい」と、

〽そのまま走り来て、

「もし何のこってござりんす。まあ下においんなんし」

「おお痛いわえ、ええこの気違いめが、さあ、こうどっさりと座るが最後の介、客があろうが立たせまいぞ」

「そりゃもう、知れしさ」

〽跡に二人は拗（す）ね合いの、果てしなければ蘭蝶は、物をも言わず、ずっと立つを、〽此糸は引き止めて、

「こりゃどこへ行きなんす」

「どこへ行こうとお構いなさんな。俺が体で俺が足で、向うへでも隣りへでも、好きな所へ行きやすのさ」と、

〽また立ち上るを引き戻し、

「ほんにあんまり虫がようありんすえ」

「あい、お前に似てさ、下腹に毛虫のない、恐ろしい蛇むかで、呑まれぬうちにもう帰る、女房が松虫、さっぱり縁をきりぎりす、あのここなしよにんのゲジゲジめ、紙に包んで一昨日来い、とさ。あっち へ稲虫、いなご〳〵」

〽いなご〳〵と蹴散らかす、身振りは中車、高麗屋、市川流の口説なり。

〽此糸は恨めし気に、男の顔を打ちまもり、

「お前のそうした癇癪は、いつもの癖とは言いながら、あんまり邪険な心意気、今さら言うも過ぎし秋」

〽四ツ谷で初めて逢うた時、好いたらしいと思うたが、因果な縁の糸車、

「そう言えば、そんな物じゃが、ひょっと奥の客めが粋な奴で、そなたの気が変わろうかと、こりゃ真のこと受け取って」

「お前もまあ、それほど気遣いなら、ちょっと覗いて見さんせ」と、

〽引き連れて襖の隙間、

「あれ、あちら向いてる女中さん、わたしゃあそこへ行くほどに、とっくりと見さんせ」と、

〽暖簾押しあけ、此糸は、

「さぞ、お淋しゅうござんしたろ」

〽そばに言い寄れば、

「あい、お前にはお客が来たそうなが、蘭蝶というお人かえ」

「あい、いえいえ」

「そりゃ誰さんでも構わぬが、これ此糸さん、お前はなぁ、お顔には似合わぬ恐ろしい恨めしいお人じゃな、アこう言うたら、この女子は気違いか、とけもないこと言うと思わんしょうが、私はの、こなさんのお深間、蘭蝶が女房宮でござんす」

「ええ、あのお前が」

「ささ、さぞびっくりさんしたろうが、私が今日来たのは、定めし逢うて存分言うかと思わんしょうが、そこはずっと取って退けて、折り入っての相談、とっくり聞いてくださんせや、大方ぬしの話で何もかも聞かんして、知り抜いていさんしょうが」

〽言わねばいとど堰かかる、胸の涙のやるかたなさ。

「あの蘭蝶殿と夫婦の成り立ち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

〽縁でこそあれ末かけて、約束堅め身を堅め、世帯堅めて落ち着いて、ああ嬉しやと思うたは、ほんに一日あらばこそ、そりゃ誰故じゃ、こなさん故、大事の男をそそのかし、夜昼となく引きつけられ、その恨みを打ち捨てて、互いの為の心底話。

六、義太夫　傾城阿波の鳴門

（十郎兵衛住家の段・前）

お　弓　竹本　駒之助

おつる　竹本　土佐子

三味線　鶴澤　津賀寿

【解　説】

近松半二、八民平七ほかの合作。明和五年（一七六八）六月、大坂竹本座初演。近松門左衛門作「夕霧阿波鳴門」と歌舞伎「けいせい睦玉川」を下敷きに、伊達騒動（作中では玉木家）と海賊阿波十郎兵衛伝説を取り合わせた全十段の作品。そのうち八段目「十郎兵衛住家」通称「巡礼歌の段」がよく演奏される。今日は前後に分けての演奏。

阿波の国の国主玉木衛門之助が吉原の遊女高尾におぼれているのを幸いに、悪家老小野田郡兵衛がお家横領を企てる。家老の桜井主膳はこれを憂えていたが、預かっていたお家の重宝国次の銘刀を盗まれてしまう。刀の行方を探すように命じられた主膳の家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて盗賊の仲間に入り、妻のお弓とともに金策と銘刀探索に苦心していた。しかし盗賊の詮議はきびしく、仲間は何人かが捕らえられており、今日にも捕手が来るだろうと、仲間から連絡があった。

そんな日、十郎兵衛が外出したあとに、巡礼の女の子が巡礼歌を唄いながら来て「巡礼にご報謝」といって門口に立った。

今日はここからの演奏になる。時間の都合で前と後に分けたが、後もぜひ聴いていただきたい。

【歌詞】

〽道へ立ち帰る。

〽後打ち眺め女房が、心がかりと封押し切り、読む度ごとに驚く胸。

「ヤア、こりやこれ、夫を始め『仲間の衆へも吟味がかかり、詮議厳しくなったるゆえ、捕えられし者もあり。最早遁れず立ち退け』との知らせの状。スリヤ夫十郎兵衛殿の身の上も、今日一日に迫つた難儀、昨日長町裏で危い所をようよう遁れ、ヤレ嬉しやと思う間もなく、今またこの状の文体では、なか／＼こうしていられぬところ。我とても女房の身、ことに騙りの同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今さら驚く気はなけれど、一合取っても侍の、家に生れた十郎兵衛殿、盗み騙りと成り果てしも、国次の刀詮議のため、重い忠義に軽い命、捨つるは覚悟と言いながら、肝心のその刀、在所も知れぬその内に、もしこの事が顕われては、これまで尽くせし夫の忠義、皆無駄事となるのみか、死んだ後まで盗賊に、名をけがすのが口惜しい。盗み騙りも身欲にせぬ、女夫が誠を天道も、隣れみあって国次の刀の詮議済むまでの、夫の命助けてたべ」と、

〽心の内に神仏、誓いは重き観世音。

〽ふる里を、遥々ここに、紀三井寺、

「順礼にご報謝」と、

〽言うも優しき国訛。

「テモしおらしい順礼衆、ドレ／＼報謝進じょう」と、

〽盆に白米の志。

「アイ／＼、有難うございます」と、

〽言う物腰から爪外れ、

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御たち、国はいずこ」と、

〽尋ねられ、

「アイ、国は阿波の徳島でございます」

「何じゃ徳島、さってもそれは、マア懐かしい。わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼さんすのか」

「イエ／＼、その父様や母様に逢いたさゆえ、それでわし一人、西国するのでございます」と、

〽聞いてどうやら気にかかる。お弓はなおも傍に寄り、

「ム、父様や母様に逢いたさに、西国するとはどうしたわけじゃ、サそれが聞きたい、言うて聞かしゃ」

「アイ、どうしたわけじゃ知らぬが、三つの年に父様や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら行かしゃんしたげな。それで私は婆様の世話になっていたけれど、どうぞ父様や母様に逢いたい、

顔が見たい。それで方々と、尋ねて歩くのでございます」

「ムム、シテその親たちの名は何と言うぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、

〽聞いてびっくり、

「アアコレ／＼、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓。三つの年別れて、婆様に育てられていたとは、疑いもない我が娘」と、

〽見れば見るほど幼な顔、見覚えのある額の黒子。

「ヤレ我が子か、懐かしや」と、

〽言わんとせしが、『待てしばし。夫婦は今も取らるる命、元より覚悟の身なれども、親子と言わばこの子にまで、どんな憂き目がかかろうやら、それを思えばなま中に、名乗り立てして憂き目を見んより、名乗らでこのまま帰すのが、かえってこの子がためならん』と、心を鎮めよそよそしく、

「オオそれはまあ、それはまあ。年端も行かぬにはるぐの所を、よう尋ねに出さっしやったのう。その親たちが聞いてなら、さぞ嬉しうて嬉しうて飛び立つ、サア、飛び立つようにあろうが、ままならぬが世の憂きふし。身にも命にもかえて、可愛い子を振り捨て、国を立ち退く親御の心。よく／＼の事であろう程に、酷い親と、必ず／＼恨みぬがよいぞや」

「イエ／＼もったいない、何の恨みましょう。恨みる事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覚えず、よその子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしゃんすを見ると、わしも母様があるなら、あのように髪結うて貰おうものと、羨ましゅうございんす。どうぞ早う尋ねて逢いたい、ひょっと逢われまいかと思えば、それが悲しゅうございんす」と、

〽泣いじゃくりするいじらしさ、母は心も消え入る思い。

「さても／＼世の中に、親となり子と生まるるほど深い縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立ったり、思うようにならぬが浮き世。こなたもどれほど尋ねても、顔も所も知らぬ親たち、逢われぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、国へ去んだが良いわいの」

「イエ／＼、恋しい父様や母様、たとえいつ迄かかってなと、尋のうと思うけれど、悲しい事は一人旅じゃてて、どこの宿でも泊めてはくれず。野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にいたりゃ、こんな目には逢うまい物を、どこにどうしていやしゃんすぞ。逢いたい事じゃ、逢いたい事じゃ、逢いたい」と、

〽わっと泣き出す娘より、見る母親はたまりかね、

「オオ道理じゃ、可愛や、いじらしや」と、

〻我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが『これほど親を慕う子を、何とこのまま去なさりよう。いつそ打ち明け名乗ろうか、イヤ〳〵それではこの子も同じ罪、その時の悲しさを思い回せば、去なすがため』と、

「オオ段々の様子を聞き、わが身のように思われて、悲しいとも情けないとも、言うに言われぬ事ながら、とかく命が物種。まめでさえいりや、また逢われまい物でもない。コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩いでも出りゃ悪い。どこをしょうどに尋ねうより、その婆様の方へ去んでいるとの、追っ付け父様や母様が逢いにいてじゃ程に、悪い事は言わぬ、悪い事は言わぬ、なんのまたこのおばが、わが身のためにならぬ事を言うてよいものか、よいものかいの。思い直して、これから直ぐに国へ去んで、随分まめで親たちの尋ねて行かしゃるを待っているのがよいぞや」と、

〻言いつつ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶ餞別と、紙に包んで持って出で、

「コレ、なんぼ一人旅でも、たんと銭さえやりゃ泊める。わずかなれども志、この銀を路銀にして、早よう国へ去にゃ、ヤ、必ず〳〵煩うてばしたもんな」と、

〻銀を渡せば押し戻し、

「アイ、嬉しゅうござんすれど、銀は小判という物を、たんと持っております。そんなりゃもう参じます、かたじけのうございます」と、

〻泣く〳〵立つを引きとどめ、無理に持たして塵打ち払い、

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、マ今一度顔を」と

〻引き寄せて、見れば見るほど胸迫り、離れ難なき憂き思い。

〻それと知らねど誠の血筋、名残り惜しげに振り返り、

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢われる事ぞ、逢わしてたべ、南無大悲の観音様」

〻父母の、恵みも深き粉川寺、〻泣く〳〵別れ行く跡を、見送り〳〵延び上り、

「コレ娘、ま一度こちら向いてたも、向いてたもいの。せっかく長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢いは逢いながら、名乗らで退かす母が気は、どのようにあろうと思う。狂気半分、半分は死んでいるわいの。まだ生い先のある子をば、親ゆえ路頭に立たすか」と、

〻そのままそこにどうと伏し、消え入るばかり嘆きしが、起き直って涙を押さえ、

「イヤ〳〵、どう思いあきらめても、今別れてはまた逢う事はならぬ身の上、たとえ難儀がかからばかかれ、またその時は夫の思案。程は行くまい追い付いて、連れて戻ろう。そうじゃ〳〵」と

〻子に迷う、道は親子の別れ道、後を慕うて。

七、清元　忍逢春雪解（三千歳）

浄瑠璃　清元延寿太夫
清元美寿太夫
清元一太夫
三味線　清元梅吉
上調子　清元昂洋

【解説】

河竹黙阿弥作詞、清元お葉（四世延寿太夫の妻）あるいは二世清元梅吉作曲といわれ、この二人の合作だったかも知れない。明治十四年（一八八一）三月、東京新富座で「天衣紛上野初花」の六幕目大口屋寮の場で余所事浄瑠璃として初演された。

お尋ね者となった片岡直次郎は、逃げる途中で恋人の三千歳に一目逢いたくなる。入谷の寮で三千歳が療養中と知って、降りしきる雪の中、尋ねて行く場面で演奏された。

歌舞伎ではこの前に蕎麦屋の場面があり、蕎麦を食べながら手紙を書き、按摩の丈賀に持たせてやる。またそのようすをうかがっていた丑松が、身の安全のために訴人するというエピソードがある。

清元は比較的新しい浄瑠璃で、文化十一年（一八一四）に富本から分派独立したもの。語るよりも歌う要素が強く、とくに江戸庶民に喜ばれた。

【歌詞】

〽冴え返る、春の寒さに降る雨も、〽暮れていつしか雪となり、上野の鐘の音も凍る、細き流れの幾曲り、末は田川へ入谷村。

〽廓へ近き畦道も、右か左か白妙に、往き来のなきを幸いと、人目を忍びたたずみて。

「思いがけなく丈賀に会い、頼んでやったさっきの手紙、もう三千歳の手へ届いた時分、門の締りが開けてあるか、門からそっと当って見ようか」

〽確かにここと目覚えの、門のとぼそへ立ちよれば、風に鳴子の音高く、〽驚く折から新造が、灯したずさえ立ち出でて、

「今鳴子の鳴ったのは、風のようではなかったが」

「大方ここへ直はんが」

「ああ、もし静かにしなましよ」

〽差し足なして千代春が、とぼそへ寄りて声ひそめ、

「もし、直はんざますか」

「お、そう言う声は千代春さんかえ」

「さ、早くこっちへ入んなましよ」

「わちきは奥の花魁へ、お知らせ申して参りんしょう」

〽気転きかして奥戸口、互ひに心合鍵に、とぼそを開けて伴う折から、〽門の外には丑松が、内の様子を伺いて、一人うなずき雪道を、飛ぶが如くに急ぎ行く。

「やっとの思いで忍んで来たんだ、聞きゃ三千歳は患っているそうだな」

「それもみんな、お前はん故でありんすよ」

〽晴れて逢われぬ恋仲は、人に心を奥の間より、〽知らせ嬉しく三千歳が、飛び立つばかり立ち出でて、訳も涙にすがりつき、

「花魁」

「直はん」

「ここでゆっくり」

「お話しなんしえ」

〽廓に馴れたる新造が、話の邪魔と次の間へ、粋を通して入りにける。

〽あとには二人差し合いも、〽涙ぬぐうて三千歳が、恨めしそうに顔を見て、

「わずか別れて居てさえも」

〽一日逢わねば千日の思いに、わたしゃ患うて、針や薬のしるしさえ、泣きの涙に紙濡らし、枕に結ぶ夢さめて、いとど思いのますかがみ。

〽見る度毎に面痩せて、どうで長らえ居られねば、殺して行って下さんせと、男にすがり嘆くにぞ、

「悪事をなしてお仕置を、受けりゃ先祖代々の墓へ入れぬ、この身の上、回向院の下屋敷へ俺の墓をば建ってくれ、これがお主へ、おれの頼みだ」

〻これが頼みと手を取りて、共に涙にくれにける。

〻男も愚痴にからまれて、持て余したる折からに、〻始終を聞いて寮番の喜兵衛は一間を立ち出でて、

「こういう内にも寸善尺魔、障りのないうち、さあ〳〵早うお逃げなされませ」

〻実に桓山の悲しみも、斯くやとばかり降る雪に、積る思いぞ残しける。

（終演　一五時予定）

※演奏者により歌詞に若干の違いがある場合もございます。また、歌詞の中に今日の人権意識に照らして、一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、その点はご了承ください。

第二部　番　組　（十六時開演）

一、一中節　廓の寿

浄瑠璃　宇治　紫文
宇治　紫希
三味線　宇治　紫津
宇治　紫卯

解説：配川　美加

【解　説】

廓というのは新吉原のこと。それ以前の吉原は元和三年に、庄司甚右衛門という者が幕府の許可を得て開いたといわれるが、明暦三年（一六四五）の江戸大火（振袖火事）を機に浅草寺の裏に移転した。これを新吉原という。

それから百五十年というから、文化元年（一八〇四）に五世都一中と初世菅野序遊が作曲したものと伝える。内容は狂言の「都見物左衛門」の趣向を借りて、吉原のことを賛美している。これは何かというと吉原のことを話題にして題材にした、当時の流行にしたがったもので、今ではわからないことが多い。

一中節は十七世紀末ごろに京都で初代都一中が創始したもので、その弟子たちから現在の常磐津、清元、新内、宮薗などの浄瑠璃が分派した。現在は都派、菅野派、宇治派があり「古曲」のひとつになっている。

335

【歌詞】

〽まかり出でたる者は、ご存じのお江戸見物左衛門にて候。承れば百五十年以前、二万七百六十余坪の地所を賜り、この所へ移されて、今の廓を新吉原と申せば、まことにめでたい色里でござる。なお千代までと君が父を寿き、山谷風流のあらましを、諸君子方へやつがれが、さらばお話申さんと、

〽扇おつとり立ち上がり、

二上り〽まずご覧ぜよ西に富士、北に筑波の山際も、あけぼの匂う白繻子の、腰巻羽織伊達衣裳、白きお馬に召したる殿御、手綱とりんぼ姿が雅致で、粋な心と三浦屋の、誰が思惑か白茶苧の、下着に物を思えとて、移り香さめぬ後朝に、〽旅人の井も凍て解けて、見返り柳土手節に、合の手残す清掻に、てんてつとんと打ち込んで、君が住家と思えばよしや、草の枕も玉の床、人目思わで通えば通う、しげれ松山細道。鶉格子に立て出しの、井筒三よしが弄齋を、聞いて嬉しき時鳥、傘売りも一声を、待つに長柄の紋日とて、振って振りだす八文字。

〽おろし歩みに左褄、これこの里の慣らい事、どっと誉めて通した。揚屋／＼の水鳥ら、ある夜その夜は初雪を、酒に明かして対月と、うわさにきくの盃開き。

〽君は千代ませ千代ませと、繰り事を祝い歌。散茶梅茶も香に匂う、太夫格子の花紅葉、都の錦こきまぜて、賑おう里の全盛を、万々歳とぞ祝しける。

二、義太夫　傾城阿波の鳴門

（十郎兵衛住家の段・後）

お　弓　竹本　土佐恵

十郎兵衛　竹本　越　孝

おつる　竹本　佳之助

三味線　鶴澤　寛　也

【解説】

巡礼姿の娘のお鶴を、いったんは追い返したお弓が、おつるの跡を追って出かけた跡に、十郎兵衛が近所で乞食たちにいじめられていたお鶴を助けて、娘とは知らずに連れてくる。

銘刀探索のために金の欲しい十郎兵衛は、お鶴の持っている金を貸してくれと頼むが、聞き入れるどころか、怖がって泣き出してしまう。

後はここからの演奏。おしまいは、わが子の死骸もろとも家に火を放って落ちて行くまで。

もとの「傾城阿波の鳴門」は、四段目から七段目に夕霧伊左衛門の話などがあるが、通して上演されることはなくなり、この八段目だけが独立して演奏されるようになった。

それは、前では母がそれと知っていて名乗れぬ娘というつらい場面。後では父とそれとは知らない娘という対照的な設定が鮮やかで、親子の情愛と悲劇が見事に描かれているからである。

なおこの八段目は別に「どんどろ」とも言われたが、それは十郎兵衛夫婦の住居が土井殿前の大師近くにあったため、「土井殿」を略して「どんどろ」といったからであるが、今日ではこういう人も少なくなった。

【歌詞】

〽尋ね行く。

〽すでにその日も入相の、金子の工面も引き違い、わが家へ戻る十郎兵衛、順礼の子の手を引いて、

「女房共、戻ったぞ」と、

〽内へ入って見回し見回し、

「こりゃ日暮れまぎれに灯も灯さず、どこへ行った」と、

〽つぶやき〳〵行燈灯し煙草盆、提げてどっさり高胡座。

「コレそこな子、サ、マアここへおじゃ、ここへおじゃ。ハテマアここへおじゃいの。今小父が戻る道で、乞食どもが寄り集まり、わが身を剥いで金取ろうと、抜かしておるを聞いたゆえ、それでおれが連れて戻ったが、わが身ゃ銀でも持って居やるかいの」

「アイ、よその小母様に貰うて持っております」

「ムム、何がそんな事をと悪者どもが頑張って、オオあぶない事じゃ、あぶない事じゃのハハハ…。そしてその金はどれほどある、どれ小父に見しゃ、小父に見しゃ」

「アイ、これほどござんす」と、

〽貰うた銀を差し出だせば、

「ムム、こりゃ小玉が五十匁ばかり。そしてもう外に銀はないか」

「イエ、まだ小判という物が、たんとござんす」

「エエ、何じゃ小判がたんとある、アノ小判が。てもマアそれはよい物を持っていやるの、ハハハ…。これ、このあたりは用心が悪いによって、そのように子供が銀持っていると、つい人に取られてしまう。どれ、小父が預かってやろう、ここへ出しゃ」と、

〽武太六に約束の、足しにもなろかと心の工面、騙しかくれど、合点せず、

「イエ〳〵、この財布の中には大事の物が包んであるほどに、人に見せなと婆様が言わしゃんしたによって、誰れにもやる事なりません」と、

〽大事にするほど、なお見たく、『威して見ん』と目をいからし、

「エエその様に隠すと、ためにならぬぞよ」

「サア、それでも大事の銀じゃもの」

「サイアイ、その大事の金じゃによって、持っているとためにならぬ。片意地言わずと預けておきゃ」と、

〽言うほど怖がる子供心、

「エエ、こんな所に居る事いやや」と、

〽逃げ出る首節引っ掴めば、

「あれ怖い〳〵」

「エエ、やかましい、やかましい。近所へ聞こえる、声が高い」と、

〽口へ手を当て、

「これ、なんにも怖い事はない、なんにも怖い事はない。ありようはわしもちっと銀の要る事があるによっての、なんぼほどあるか知らねども、二三日預けてたもや。その内にはまたこしらえて戻そうほどに、マアそれまではこちの内にゆるりっと逗留しや。また観音様へもこの小父が連れて参るほどに、よい子じゃ、聞き分けて、サアちゃっと借してたも」と、

〽両手放せば、がっくりと、そこへそのまま倒るる娘、

「コリャなんとした、どうした」と、

〽言えどもさらに物言わず、息も通わぬ即死のありさま、

「ヒャア南無三宝、コリャ目が回うたか、コリャ順礼の、ム、順礼の娘やい」と、

〽呼び活け〳〵口押し明け、

「コリヤコレ、気付けも水ももう叶わぬか、ホイ」

〽『ハツ』とばかりににわかの敗亡、

「エエ、声立てさせじと口へ手を当てたが、思わず息を留め、それで死んだか、ハアこりゃ、まあ不憫」

〽とばかり。呆れ果てたる折からに、表へ聞こゆる足音は、

『女房ならん』と、蒲団で死骸。堤伝いを息せきと、戻るお弓が、

「オオ、こちの人戻ってか、サア、ちゃっと往て尋ねて、尋ねて〳〵」

「ヤイ〳〵うろたえ者、後先いとわず尋ねてとは、そりゃマア一体何を尋ぬるのじゃ」

「サイノウ、お前の留守のその間に、国に残した娘のおつるが、不思議とここへ来たわいのう」

「ヤ、何じゃ娘が来た、そりやマア何かい、母者人と一緒にか」

「イエ〳〵、おつる一人でござんする。ようすを言えばい事、不思議に娘と知ったゆえ、飛び付くように思うたれどな、悲しい事はお前もわしもお尋ねの身」

「アアコリヤ、大きな声すなやい」

「さいなあ、お尋ねの身分なれば今にも知れぬ身の罪科を、なんにも知らぬ娘にまで、ともに難儀をかきょうかと、わざと親子の名乗りもせず、気強う言うてこの内を去なしごとは去なしたが、後で思えば思うほど、どうも捨てて置かれぬゆえ、すぐに後から尋ねに往たれど、影も形も知れぬゆえ、それでお前と手分けして尋にょうと思うて戻った。サア、ちゃっと往て

尋ねて下さんせ、下さんせいなあ」
「ヤイ〳〵たわけめ。どんな事があるとて、おれにも知らさず追い去なすとは、鬼でもそんな胴慾な事はせぬわい。イヤ〳〵こう言うてはいられぬ」と、
〽駆け出だせしが、
「コリヤ、そして幾つばかりで、どんな着物着ているぞ」
「ハテ知れた事、年は九つ、中形の振り袖に笈摺掛けて」
「なんじゃ、笈摺掛けて」
「アイナ、笈摺も二親のある子じゃによって、両方はこう茜染め」
「アノ茜染めに、中形か」
「アイノウ」
「ホイ」
〽『ハツ』と肝に焼きがね刺ささる心地、
「エエコレ、ひまが入るほど心が済まぬ。お前は跡からわしゃ先へ」と、
〽言い捨て駆け出すお弓を留め、
「アアコリヤ待て、もう尋ねずともよしにせい。娘はとうから戻っているわい」
「エエ戻って居る、戻っているとは、そりやマアどこに」
「ソレ、そこの蒲団の内に、よう寝入っているわい」と、
言うに不審もたつ縞の、蒲団を明けて顔見るより、
「オオほんに娘じゃ〳〵、オオ嬉し。エエマお前もこんな事なら、とうからそうと言うたがよい。人に息せいもまして、エエなんじゃいな、マア嗜ましゃんせ」と、
〽恨みながらも気はいそいそ、
「なんとマア見やしゃんしたか、大きうなろうがな。そしてマア滅相な、いかにくたびれていればとて、からげも下ろさず、笈摺も掛けたなり。ドレ〳〵帯解いてゆっくりと、久しぶりで母が添え乳」と、
〽笈摺はずし帯解く解く、見れば手足も冷えわたり、息も通わぬ娘の死骸。
「ヤア、コリヤ娘は死んでいる。どうして死んだ、どうして」と、
〽あまりの事に涙も出でず、立ったりいたり夫のそば、
「コレイナコレ、あの娘はどうして死んだ、お前、ようす知ってじゃあろう、サア、サササ…言うて聞かして、聞かして」と、
〽気も取りのぼすありさまを、見るに皮肉も離るる切なさ。
「ホホ、道理じゃ、もっともじゃ、もっともじゃ、もっともじゃわい。様子というたら因果づく、さっきに内へ戻る道で、その娘が銀を

持っているを、非人どもがよう知って、取るの剥ぐのと聞いたゆえ、可愛そうにと連れて戻り、ようすを聞けば金もあるゆえ、少々なりとも武太六に返す工面、二三日貸してくれとわけを言えども子供の事、声山立てて泣きわめく。とっともう、近所の聞こえが気の毒さに、つい口を押さえたが息が詰まって、ソ、ソ、ソレ、そのように死んでしもうた。エエ、いじらしい事したと、よそのように思うたが、それが娘であったとは、物の報いか因縁事、コリヤ、こらえてくれよ女房」と、
〽聞くほど身も世もあられぬ悲しさ。
「そんならお前が殺さしゃったのかいな」
「コリヤ」
「テモお前が殺さしゃんしたのかいな。ハテ、テモさてもぜひもなや、情けなや」と、
〽母は死骸を抱き上げ、
「コレ娘、これほど酷い親々を、よう尋ねて来てたもったの。一人旅では泊め手はなく、野に寝たり山に寝たり、怖い事や悲しい事も、父様や母様に逢いたさゆえと言やった時はノコレ、悲しうて悲しうて、身ふしも骨も砕くる様にあったれどナア、そこをじっと辛抱して、親とも言わず退なしたのは、わが身が可愛さばっかりじゃ。なんの憎うて去なそうぞ、なんの憎うて去なそうぞいなあ。その時留めて置いたらば、こういう事もあるまいに、退なしたゆえのこの間違い、それから起った事となれば、殺さしゃったもわしが業、コレ、堪忍してたも、堪忍してたもや。年端もいかいではるばるの、道を厭わず苦労して、親を尋ねる孝行娘、親は、それには引き替えて、むごうつれのう追い返し、まだその上に親の手で、殺すと言うはエエマ何事ぞ。別れに言やった順礼歌、父母の恵みも探き粉川寺。どこにこれが恵みが深い、こんなむごい親々が、広い唐にも天竺にも、マ一人とあるものか」と、
〽死骸の顔にわが顔を、押し当て押し当て抱きしめ、流涕焦がれ伏し沈む。
〽にわかに騒ぐ声足音、十郎兵衛きっと心付き、
「コリヤコリヤ女房、あの物音は必定捕手に違いない。何百人取り巻くとも、刀を我が手に入れん内は、切って〳〵切り抜ける」と、
〽娘の死骸を引っ抱え、泣き入る女房を引き立て引き立て、一間の内へ入りにける。〽逃げ行くすき間に女房が、
「この間にちゃっと十郎兵衛殿」

「オオ合点、コリャ女房、娘の死骸はなんとした」
「そりゃ気遣いござんせぬ、これ、この通り」と、
〽死骸の上、落ち散る戸障子積み重ね、松明（たいまつ）の火を差し付けて、
人手に渡さぬ火葬の営み、『南無阿弥陀仏』と合わす手も、
別れ別れて立ち出ずる。

三、新内　関取千両幟（せきとりせんりょうのぼり）

浄瑠璃　新内　剛　士
三味線　鶴賀　喜代寿郎
上調子　新内　仲之介

【解説】

初代鶴賀若狭掾作曲とされてきたが、二代目家元鶴吉作曲かも知れない。原作は義太夫の「関取千両幟」（明和四年〈一七六七〉八月、大坂竹本座初演）。これは当時大坂で人気のあった稲川、千田川両力士をモデルに「双蝶々曲輪日記」を下敷きにした相撲の立て引きを描いた物語。その二段目の「髪梳き」と「相撲場」が新内化されている。

二百両の金策に稲川は悩んでいる。今日の鉄ケ嶽との取組に、わざと勝ちを譲ればいいのだが、それはできない。そんな大事な事を話してくれないので女房は不満である。髪を梳きながらの「相撲取を夫に持てば」のクドキ。稲川が出掛けたあと女房がかけ出すまで。このあと「相撲場」では櫓太鼓とともに取組が始まる。稲川が危なくなった時、二百両の進上金が読み上げられ、稲川が勝つ。実はその金は女房が身を売った金であった。

新内節は古くは歌舞伎に出演していたこともあるが、十八世紀半ばごろから初代鶴賀若狭掾が新作を提供し、それを語った弟子の鶴賀新内の語り口が喜ばれ、新内節と呼ばれるようになった。十九世紀からは独特な「新内流し」という営業方法がとられてから江戸庶民に歓迎され、現在にいたっている。

【歌詞】

〽出でて行く、あとに稲川もろ手を組み、思案に暮れて居たりしが、
「段々日限りの切れた後金、親方が催促するも九平太が皆仕業、魚心あれば水心あり、コリャ今日の相撲を振ってやらざァなるまいわいのゥ、それそれ彼と俺とが立ち合うこそ幸い、美しう振ってやり、彼奴に勝ちを譲っておいて、その上で引退させず頼むが近道上分別」
〽とはいえ名取の鉄ケ嶽、
「どう魂胆してなりとも投げねばならぬ今日の相撲、いわば一生懸命の大事の相撲を金ゆえに」
〽振ってやる稲川が、心の中の切なさ汚なさ、摩利支天にも見放され、相撲冥加に尽きたかと、思い廻せば廻すほど、空恐ろしさ口惜しさと、思わず拳を握りつめ、身を震わして男泣き。
〽始終立ち聞く女房が、涙かくして、
「申し稲川どの、色も青ざめ、そして目の中もうるんで、どうやら気色の悪そうな顔付き、モ今日の相撲へは断り言うて行かしゃんすなェ」
「何をあんだらつくすぞえ、いつはともあれ今日の相撲は鉄ケ嶽にこの稲川、初日の出ぬ先から町中が待っている晴の出合い、何でも鉄ケ嶽めを土俵の砂に埋まにゃおかぬ」
「イヤイヤそりゃ嘘じゃ今日の相撲は鉄ケ嶽に、振ってやるお前の心」
〽と言う口押さえて、
「コリャ声が高い、スリャ先刻にからの様子残らず」
「アイ一ト間で聞いておりました、僅かな金に手詰まって、難儀さしゃんすがわしゃ悲しい、いっそこの訳親父様へ」
「たわけめ、それ言うほどならこのように人に叩かれ踏まれはせぬわヤイ、昔気質の親父様、打ち明けてもの言うと禮三様への意見の何のとやかましい、若いお人の水の出端、もし命生涯になった時は、千日に刈った茅じゃわやい。アア急な事でさえなくば工面のしようもあろうに、僅か二百両や三百両の金ゆえに、大事の相撲を振ってやらざなるまいと思えば、不甲斐ないやら口惜しいやらで、俺はこの胸が裂けるようなわやい」
「オオ道理でござんす。道理じゃ道理じゃ」
〽さりながら、どれほどの大事のこと、連れ添う女房に隠さんす、お前の心が聞こえぬぞや、〽相撲取りを夫に持てば、江戸長崎国々へ行かしゃんしたその後の、留守はなおさら女気の、ひとりくよくよ物案じ、思い過ごしの胸の内推量してと、取り縋り、恨み涙に時移る。〽早やおい〳〵の呼び使い、

「申し関取土俵入りでございます、早うお出でなされませ、チャット〳〵」
〽に稲川が、しお〳〵として立ち上がれば、
「もうお前は行かしゃんすか」
「おお、鉄ケ嶽を抱き込んで、工面の通りゆきゃ格別」
「もしもゆかねば」
「絶対絶命、これが暇乞いになろうも知れぬ、さらば」と、
〽ばかり一声を、残して出でて行く。
「これまあ、待って稲川殿、たった一言言いたいこと」と、
〽見れどもあとは雲霞、
「コリャこうしてはいられぬところ、夫の命にかかわる勝負、わしもこれから相撲場へ」と、
〽帯引き締めて夫の後慕うてこそは、〽行く空に響く櫓のとうからと、打ちしもうたる太鼓よう鳴り渡ったる稲川と鉄ケ嶽との相撲割、表にベッタリ張り紙も、張り裂く木戸口、押し合いへし合い、はや土俵入りの事終わり、相撲の数々取り尽くし、中入り前ぞ勇ましき。

四、常磐津　関の扉（下）

浄瑠璃　常磐津　文字増十

常磐津　文字由乭

常磐津　美　奈　衛

常磐津　文字満咲

三味線　常磐津　文字孝代

常磐津　文字東久

上調子　常磐津　孝　野

【解説】

本名題「積恋雪関扉」。天明四年（一七八四）十一月、江戸桐座の顔見世狂言「重重人重小町桜」の大切浄瑠璃として初演された。劇神仙こと宝田寿莱作詞、二世岸沢式佐作曲。常磐津曲というより、豊後系浄瑠璃としても大曲で、筋の展開、規模の大きさ、音楽的な処理など、あらゆる面で最高傑作といわれている。今日は時間の都合で下の後半の演奏。

四位の少将良岑宗貞が逢坂山の関所のそばに庵を結び、亡き帝の愛樹小町桜を守護している所へ、恋人の小町姫が尋ねて来て久しぶりの対面。そこへ「二子乗舟」と血潮で書かれた片袖を鷹が運んでくるので、弟安貞の死を知ると同時に、関守の関兵衛が怪しいと思うまでが上の巻。関兵衛が盃に映る土星を見て、小町桜を伐って塚の神に祈れば大願成就と伐ろうとすると、懐の勘合の印が飛び去り、気を失う。そこへ小町桜の精の墨染が、傾城姿であらわれる。今日の演奏はここから。関兵衛は怪しいと思ったが、そしらぬ顔で廓話になり、やがて関兵衛は天下をねらう大伴黒主と見破られるまで。

【歌詞】

二上り〽仇し仇なる名にこそ立つれ、花のつぼみのいとけなき、禿立ちから廓の里へ、根ごして植えて春ごとに、盛りの色を山風が、来ては寝よとのかねごとも、泊り定めぬ泡沫の、水に散りしく流れの身、〽関守は心付き、

「やあ、いずくともなく見馴れぬ女、この山陰の関の扉へは、いつの間にどこから来たのだ」

「あい、わたしゃあの、撞木町から来やんした」

「むむ何しに来た」

「逢いたさに」

「そりゃ誰に」

「こなさんに」

「なに俺に、そりゃなぜ」

「色になって下さんせ」

「え、何がどうしたと」

「さあ、恥ずかしい事ながら、わたしゃ見ぬ恋に憧れて、雪をも厭わず遥々と、ここまで来たほどに、どうぞ色よい返事をしてくださんせ」

「こりゃ有難いと言いたいが、どうも合点がいかぬわえ」

「ああ、お前もまあ疑い深い、そこが歌にもいえる、桜咲く、桜の山の桜花」

「咲く桜あり、散る桜あり」

「思い思いの人心じゃわいなあ」

「そう聞けばありそうな事、時に太夫さん、お前のお名はえ」

「墨染と言いやんす」

「なに墨染、あの桜の名ももとは墨染」

「ええ」

「はて、えいお名でござりますの、それはともあれ、ついに俺はまあ、廓通いをしたことがないが、廓の駆け引き」

「馴染みのしこなし、間夫狂い、実と」

「嘘との」

「手管の諸訳」

「裏茶屋出入りの魂胆まで」

「そんならここで、話そかえ」

〽行くも帰るも忍ぶの乱れ、限り知られぬ我が思い、〽月夜も闇もこの廓へ、忍び頭巾で格子先、〽行きつ戻りつ立ちつくす、〽籬の内より小手招き、〽ふわと着せたる裲襠の、裾に隠れて長廊下、毒蛇の口を逃れし心地、ほっと一息つく鐘も、引け四つ過ぎて

床の上、

「や、まだこの暖もりの冷めぬのは、さっきに帰った客でもよもやあるまいが、こりゃ他に出来たわえ、どこのどいつか知らねども、お年が若うて良い男で、お金もたんとご所持なされた色男さまと、しっぽりとお契りなされたでございましょうの、ええ腹の立つ」

「ほほほほ、こりゃおかしい、覚えもないこと言いかけて、口舌の種にさんすのかえ、ええ憎らしい」

「あ痛〳〵〳〵、あ痛いわい、こんな所に居ようより、帰りましょ帰りましょ」

〽これ往のうやれ、わが故郷へ帰ろやれ、

「や、そなたは何を泣くのじゃ」

「さあこれは、おおそれ〳〵、この片袖は、よその女中さんから書いてよこしゃんした、起請じゃの」

「ええお前はなあ」

〽これこのように初めから、起請誓紙を取り交し、深いお方がありながら、隠しておいてまたわしに、色で逢うとはようもまあ、騙さんしたが憎らしい、〽そうとも知らず慕い来て、見ればはかなや片袖の、血汐の文字は亡き跡の、形見と思えばいとどなお、〽これ懐かしい悲しいと、言葉に色は含めども、心の剣穂に表れ、立ち寄る女を、〽はったとねめつけ、

「最前よりこの片袖に、心をかくる怪しき女、様子を明かせなんと〳〵」

「おお、この片袖は夫の血汐、それのみならず、最前わが業通にて手に入れし、勘合の印を所持なすからは、様子があろう、本名あかせ、何とじゃ」

「かくなる上は何をか包まん、我こそは中納言家持が嫡孫、天下を望む大伴の黒主とは、俺が事だわやい」

「さてこそ」

「我に恨みをなさんとする、そもまず汝は何者じゃ」

〽わが本性の桜木を、邪険の斧にかかりしぞや、報いのほどを思い知れと、ありあう桜を呵責の笞と、はったと睨むありさまを、〽やあ、こしゃくなと無二無三、〽斧取り直して打ちかかれど、凡人ならぬ精霊の、業通自在の身も軽く、ひらりひら〳〵〳〵、〽飛び交う姿は吹雪の桜、霞隠れや朧夜の、水の月影手にも取られず、〽見えみ見えずみまた表れて、今ぞすなわち人界の、輪廻を離れ根に帰る、しるしを見よと言う声ばかり、形は消えて桜木に、春もかくやと帰り花、雪を踏み分け踏みしだき、水に戻れば墨染の、小町桜と世にひろき、あまねく筆に書き残す。

五、清元　鳥刺し

浄瑠璃　清元　志寿子太夫
清元　美好太夫
清元　一太夫
三味線　清元　菊輔
清元　栄吉
上調子　清元　美三郎

【解説】

本名題「祇園町一力の段」。天保二年（一八三一）六月、江戸市村座で「仮名手本忠臣蔵」の書替狂言「夏浴衣国字小紋」の「祇園町一力の段」の劇中の所作事として初演されたものと推定されている。三升屋二三治作詞、初世清元斎兵衛作曲。内容は茶屋での遊びの雰囲気を盛り上げるために、幇間が鳥刺しの踊りを踊るというもの。

鳥刺しというのは、細い竹竿の先にトリモチをつけて小鳥を捕るのをいうが、江戸時代には鷹匠の配下で、餌の小鳥を捕るのを職業にしていた人がいた。それとは別に江戸時代に鳥刺しという遊戯があり、また万歳の一つで、太夫が鳥を捕るまねをし、才蔵が鳥尽しの唄を歌うのもあった。

この曲はそれらの趣向を取り入れて、鳥刺しの語呂合わせから始まり、鳥に逃げられたようすから吉原遊びになり、才蔵が歌う鳥尽しの唄。さらに都々逸があって座敷遊びが賑やかにお開きになる。

初演の時には当時の流行歌が多いので、評判になったものであろうが、現在ではちょっとわかりにくいかもしれない。

【歌詞】

二上り〽さすぞえ、さすは盃、初会の客よ、手にはとれども初心顔。本調子〽さいてくりょ／／、〽これ物にかんまえて、まずこれ物にかんまえて、ちょっとさいてくりょうか、さいたら子供に羽根やろな、鵜や小雀や四十雀、瑠璃は見事な錦鳥。〽こいつは妙々、奇妙鳥類何んでもござれ、念仏はそばで禁物と、目当て違わぬ稲むらを、狙いの的とためつすがめつ、〽いでや手並を一ト刺と、一散走りに向うを見て、〽きょろつき眼をあちこちと、鳥刺竿もそのままに、手足伸ばして捕らんとすれば、鳥はどこへか、随徳寺。〽思案途方に立ち止り、〽したり、ところてんではなけれども、突き出されても自分もの、これじゃ行かぬと捨鉢に、跡はどうなれ弾く三味線の、〽気も二上りか三下り〽浮いて来た／／来たさの、〽酒の酔い心。〽四条五条の夕涼み、芸妓太鼓を引き連れて、〽上から下へ幾度も、豊かな客の朝帰りカァ／／／／、〽烏鳴きさえ、エエ／／うまい奴めと、なぶりおかめからそこらの目白が、見つけたらさぞ鶺鴒で、あろうのに。〽日がら雲雀の約束は、いつも葭切顔鳥見たさ、〽文にもくどう駒鳥の、その返す書きかえり事、なぞと口説きで仕かけたら、堪った色ではないかいな。〽その時あいつが口癖に、都々逸文句も古めいた。〽晩に忍べと言うた故、紺の手拭で顔隠し、いつも合図の咳払い、ハックサメ、噂されたを評判に、幸いありや、有難き。〽実にご贔屓の時を得て、座敷の興も面白き、息せき楽屋へ走り行く。

六、都山流尺八本曲　霜夜

尺八　川村　泰山
　　野村　峰山
　　森田　柊山
　　尾崎　沢山
　　渡辺　紅山
　　設楽　瞬山
　　櫻井　咲山
　　川村　葵山

【解説】

都山流本曲。明治三十八年（一九〇五）二月、別府温泉で初世中尾都山が作曲。

霜降る晩秋の冴え渡る一夜、深更から明け方にかけてたえだえに鳴く虫の声を主題にした。三段に構成したもので、初段は独奏、二段は三部合奏、三段は二部合奏。なお、段の切れ目に独奏が入る。

初世中尾都山（一八七六～一九五六）は二十歳で大阪で都山流を創めた。新しい尺八楽譜を考案し、また組織を近代化するなどしたが、大正十一年に上京し、宮城道雄と新日本音楽運動に力を注ぐなど大活躍。一代で都山流王国を築きあげた。

代表作にこの「霜夜」のほか「慷月調」「青海波」「春風」「岩清水」「木枯」など二十七曲ある。

七、長唄　靱猿（うつぼさる）

唄	杵屋　喜三郎	三味線　杵屋　五三郎	笛　中川　善雄
	杵屋　吉之亟	杵屋　五　朗	小鼓　藤舎　呂凰
	杵屋　君三郎	杵屋　五吉郎	立鼓　藤舎　呂船
	杵屋　六昶倍	杵屋　五三吉次	大鼓　藤舎　円秀
	杵屋　五三蔵	上調子　杵屋　五三吉	太鼓　藤舎　華鳳

【解説】

稲垣抱節作詞、二世杵屋勝三郎作曲。明治二年（一八六九）開曲。もとは狂言の「靱猿」。それを常磐津にしたのが「花舞台霞の猿曳」で中村重助作詞、五世岸沢式佐佐曲。天保九年（一八三八）十一月、市村座初演。

これは狂言の大名と太郎冠者を女大名と色奴にしたのが特色。その前、文化十二年（一八一五）には同じく常磐津「寿靱猿」があった。それを長唄にしたもの。

本調子で靱の由来とその故事。二上りで隅田川の春の花見。本調子で猿の皮を所望する大名、太郎冠者と猿曳のやりとり。二上りでお礼の猿の舞と、劇的な内容を巧みな作曲で変化をつけ、三味線も社殿の合方、猿回しの合方などあって活躍する。なお同じ題材は一中節に「空穂猿」があり、地歌、錦琵琶にもある。

【歌詞】

本調子〻それ弓矢の始まりは、神代の時より用いしとかや聞きつらん。矢入れを靱と名付けしは、その中うつろにして、外に毛皮をかけたるは、粟の穂なぞに似たればとて、空穂とはいい伝う。

〻あら不思議やな、怪石（かいせき）裂けて石卵（せきらんしょう）生じ、たちまち化（け）して猿（ましら）となることは、人を教えのたとえ草、

〻秋吹く風に笛の音は、草刈る童子もいずくかと、たよりし先はそれならで、妻を恋しと鹿笛に、隔てられたる谷川へ、散りし紅葉も時雨に濡れて、解けて嬉しき雪の暮、面白や。

二上り〻はや新玉の春ぞ来る、ぞめき囃せし花の中、花の筵（むしろ）に弾く三味線の、その糸桜厭（いと）いなく、殿も家来もほのめく顔の、よい緋桜の向島、土手の錦も花の空、竹屋竹屋と呼ぶ舟に、乗り合わせたる猿回し、こなたの岸へと着きにけり。

本調子〻太郎冠者あるか。〻はあ御前に候。〻あれに背負うた一物を、いずくへ伴うなるか、尋ねて参り候えと、〻仰せに冠者は心得て〻のうく猿曳、止まれとこそ、その猿いずくへ曳き候やと言いければ、〻賤（しず）の男は、はあっと手を仕え、〻やつがれはこのあたりに住む猿曳にて候が、今日（こんにち）もお旦那回り

をいたそうと存じまする。心急げばやつがれは、そろり〳〵と参ろうか。〽やあれ待とうぞ猿曳、この方は隠れもない大名でおりゃる。〽今日は春野の遊びにて、弓矢をかかげ、狩に参ったるが、あれに持たせたる、鞆を内々毛皮にしようと、思う折からよい猿に逢うた。それ猿の皮を申し受けたしと、

〽聞いて驚く猿曳が、〽猿の皮をお好みとな、そもやそも、生きているものの皮が、何とてあげらるるでござろうぞ、この猿をもちまして、一日一日の命を送ります、これをあげましては、明日よりなんの手業なし、こればかりはお許しと、〽詫びるにきかぬ大名の、威を張りつめし強弓の、一矢に射てと立ちかかる。

〽ああもし、待って下さりませ、猿の皮がご用ならば、御手を下ろし射殺されましては、皮に疵がつき、ここに猿の一打と申しまして、一打にて命の失せるところがござるによって、殺して進ぜましょう。〽太郎冠者も心得て、早う〳〵と勧めけり。

〽またあるまじき殿の御意、畜類なれどもようきけよ、子猿の時より飼い育て、いまさら憂き目を見ることは、不憫なことぞ。今打つほどに、草葉の陰にても、恨みと思うてくるるなよ、あれ是非なしと振り上ぐる鞭の下、回る子猿のいじらしき。

（合方）

〽あれ〳〵今のをご覧なされましたか、打ち殺さるる鞭とは知らいで、舟漕ぐ真似をしまするぞ。〽なに、殺さるると知らいで、芸をするとは不憫なことぞ、やあい太郎冠者、打つなと言え、打つなと言え、連れて帰れと申せいと、〽聞いて喜ぶ猿曳が、ただありがたしと伏し拝み、この上の御礼に、猿に一舞まわせましょうと、声張り上げ、

二上り（合方）〽ええい猿が参ってこなたの御知行、まさるめでたき能つかまつる、（合方）

〽猿は山王、まさるめでたき、めでたさよ（合方）天より宝が降り下って増生すれば、綾や千反錦や千反、唐織物よ、地には黄金の花が咲き候、げに豊かなる時なれや。（合方）

〽げに豊かなる時なれや、〽さらば我らはお暇と、もと来し道へ帰らんと、花を見捨てて帰る雁、空も高根の富士筑波、名に負う隅田の春の夕、景色をここにとどめけり、景色をここにとどめけり。

※演奏者により歌詞に若干の違いがある場合もございます。また、歌詞の中に今日の人権意識に照らして、一部不適切な語句がありますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、その点はご了承ください。

【解説者プロフィール】

吉野雪子（よしのゆきこ）
桐朋学園大学音楽学部研究科（音楽学専攻）修了。
現在、国立音楽大学非常勤講師。専門は近世日本音楽史。
共著に「竹内道敬寄託文庫目録（その十一）」、「詞章本の世界」、「まるごと三味線の本」など。

配川美加（はいかわみか）
東京藝術大学大学院音楽研究科（音楽学専攻）修了。
現在、日本女子大学文学部非常勤講師。
専門は近世日本音楽史。
共著に「日本音楽基礎用語辞典」、「詞章本の世界」、「まるごと三味線の本」など。